



キリスト教女子教育と 近代日本文化

湊 晶子

所員／東京基督教大学教授

プロテスタント宣教140年余を経た今日でもキリスト教徒の数は一パーセント弱と言われるが、実は、この少数者グループが、近代日本形成期の日本的意識構造の変革に、大きなエネルギーを投じていたことを見逃してはならない。明治初期、中央政府や地方自治体が、学区制に基づく近代的教育制度を創出し、全国民に普通教育を普及すべく努力しつつも、経済的にも人的にも限界を示していた時、キリスト者たちは、女子、幼児、障害者、孤児など社会的弱者をも教育の対象として早くから開拓的働きに熱心に従事したのである。

明治初期には、数多くの女子教育機関がキリスト者たちによって創設された。

武田清子氏は、「近代日本のプロテスタントたちは、日本の精神的伝統に内在する人間観に、キリスト教人間観をもって対決し、あるいは、そのふところに根をおろそうと努め、キリスト教人間観に基づいた人間形成を、家庭において、学校において、また社会生活の全体を貫いて追求して来たのであった。(中略)すべての人間は神の子どもとして限りなく尊いのであり、彼らを人格として育成すべきだ」と述べ、キリスト者たちの教育への貢献度を強調した。しかし当時は、日本政府はこれを認めようとしなかった。

この時期を教育者として生きた新渡戸稲造は、この点について「日本における教育」²という講演の中で「日本は宣教師たちから慈善活動、女子教育の分野で測り知れない恩義を受けながら、政府の報告書は彼ら

の貢献については一切触れようとしない」と指摘した。この傾向は今日においても同様である。現代の女性論及び教育論の中にキリスト教人間観が欠落していることは遺憾である。

いじめ問題、人権が問われる今日こそ、聖書的人間観を真剣に見直す時であると思う。1996年4月23日共立基督教研究所に於いて「キリスト教女子教育と近代日本文化」について行った研



1897年(明治30年頃)
(中央)若き日の札幌農学校教授(現北大)新渡戸稲造と(その左)妻メアリー。前列右から2人目河井道子。
(北海道大学北方資料室)

目次

*キリスト教女子教育と
近代日本文化
湊 晶子

*アメリカにおける
ピューリタン研究の動向
増井志津代

究発表の内容を以下に簡単に要約する。

I. 近代日本形成期とキリスト教教育の誕生

明治維新前後の未だ切支丹禁制下あるいは、禁制の立札が取り除かれたばかりというような社会情勢の中で、宣教師たちの教育及び医療を通しての特色ある伝道の実として多くの学校や塾が創設され、それらを中心として誕生した日本プロテスタント人格教育は、近代日本形成の精神構造に重要な影響を与えた。

日本プロテスタントの発祥として、一般的に横浜バンド（植村正久、井深梶之助、木多庸一ら）を生み出したブラウン塾、札幌バンド（内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾ら）を育成した札幌農学校、熊本バンド（小崎弘道、海老名弾正ら）を生み出した熊本洋学校および彼らを受容して育成した新島襄の同志社があげられる。これら三バンドと日本文化との関連についての研究は、日本プロテスタント史においても詳しい。

しかし、近代日本形成期にこれらバンドの設立される以前からすでに多くの女性たちの手によって、女子教育機関が設立され、近代日本文化に重大な影響が及ぼされていたことについての言及は、日本史及び日本プロテスタント史においても不十分である。心の時代を求めようとする21世紀に向って、この欠落を充足させることは急務であると思う。

1872年（明治5年）J. バラを中心とした日本基督公会（海岸教会）の設立は、日本最初のプロテスタント教会の創設として歴史的に評価されている。しかし、その15年前、1867年（慶応3年）にはヘボン夫人が横浜に女塾を、1870年（明治3年）にはキター女史が横浜にフェリス和英女学校の前身の女子教育機関などを、すでに設立していたのである。明治22年までには全国で44校が設立されたという。更に注目すべきは、日本最初のプロテスタント教会とされる横浜海岸教会設立の44年前、1828年（文政11年）に、日本伝道のためにアメリカ婦人たちによってボストンで献金を集め始めた記録が残っていることである。歴史の表舞台から欠落している女性たちの宣教へのビジョンと奉仕を掘り起こし記録する時が来ている。

特に歴史的にキリスト教の背景をもったアメリカで、フェミニズム運動が聖書の視点を排斥して展開したのに対して、逆に日本の女性の人間形成に、キリスト教の人格論が大きな役割を果たしていたことに気付く時³、今日的視点に立って、日本文化形成とキリスト教人間観の接点を見直す必要があろう。

II. キリスト教女子教育と近代日本文化

明治政府は、一応男女別なく教育する旨をその方針に打ち出しつつも、不就学児童に女子が圧倒的に多かったことから、男子の教育が第一義的に考えられていたことを知る。横浜に女子校が次々に設立された1870年（明治3年）には、新律綱領が發布され、親子は一親等、夫・妻妾は二親等とし、夫婦関係を親子関係の下に置き、妻といわゆる妾を一緒に並べることによって、一夫多妻制を公認した。

当時一夫一婦論、妾廃止論を唱導しつづけた教育者も輩出したが、一般的に女子教育の目標は一貫して良妻賢母の育成であり、高等教育を受けることや社会に出て働くことに至るものではなかった。明治初期、宣教師たちのもたらした教育の原理は、聖書の真理に基づいて、女性を男性と同様、「人格」としての自覚をもった人間たらしめることを基本的目標とした。即ち、女性としての人格の主体の確立であった。上記の三バンドの男性指導者の中で、日本人の中にキリスト教精神に基づいた新しい女性像を形成しようとする働きに多大の貢献をした人にクエーカー教徒 新渡戸稲造と妻メアリーがある。

1916年（大正5年）臨時教育会議に於いて「学問をすると女は子を産まなくなる」論争が行われた翌年、新渡戸は「婦人に勤めて」を世に送り、「所謂良妻賢母なる主義は、人間を一種の型にはめ込む様なものである。女といえども人間である以上、人間としての教育なり、人間としての修養をしなければなりません。然るに日本の教育は、女を妻か、母か、娘か何れにしても一人立ちの人間らしくない、男の附属品の如く見ている。どうも日本の女子教育は人間の教育ではない。一個の人間として立派に出来上った婦人（人格）ならば、妻としては良妻であり、母としては賢母であることはいうまでもない」⁴と述べた。

新渡戸の人間観は、キリスト教の信仰に基づく人格の観念にあった。「日本人に欠けているのはPersonality（人格）の観念であり、PersonalityのないところにはResponsibility（責任）も生じない」⁵ことを強調した。

矢内原忠雄は、「余の尊敬する人物」の中で、「先生のいわゆる縦の関係若しくは垂直的關係というのは、個人のたましいと神との交わり、横の關係もしくは水平の關係とは、個人と個人との交わり、即ち社会的關係を指すものであった」⁶と要約しているがこの人格的人間教育こそ明治の女子教育の基盤であったと言える。これは日本人的意識構造に、全く新しい人間像を

を創造したことであり、近代日本文化に大きな影響を与えたのである。

Ⅲ. 新渡戸稲造の妻メアリーと日本の女子教育

女子の政党加入はもちろんのこと、政治的意見の表現も禁止され、「学問すると女は子を生まなくなる」と論争されるなど、女性が自立出来ない社会的抑圧の中で、新渡戸稲造夫妻は、経済的に、精神的に、社会的に、生活的に自立出来る女性を育てるために、啓蒙的な役割を果たした。

新渡戸は1891年1月1日、反対を押し切って、フィラデルフィアのフレンド派に属する名門の出で5才年上のメアリー・パターソン・エルキントン嬢と結婚。メアリーは熱心なキリスト者であり、慈善心に富んだ女性で、ウエスト・タウンスクール卒業後、哲学、世界地理、世界史、文法などの教師となり、教育に情熱を注いだ女性であった。彼女は日本の女子教育のために献身、稲造と結婚して、1891年結婚後数週間にして渡日し、札幌農学校の教授となった稲造を助けつつ、いと小さき者への教育に情熱をささげた。1894年(明治27年)には、夫妻は札幌に遠友夜学校を設立し、恵まれぬ人々の人格教育に当たった。新渡戸は終生この学校の校長を続けた(1934年)。稲造亡き後はメアリーが校長の任を引き受け、神のかたちに似せて創造された一人一人の人格を大切に教育方針をつらぬいた。

近代日本形成期の女子人格教育を考える時、クエーカー派キリスト教徒として、日本のいと小さき者へのために、生涯を献げたメアリー夫人の働きを忘れてはならない。メアリー夫人についての残された資料が少ないのは誠に残念である。筆者は現在、日米に残存する資料を収集中であり、近日中に「小さき者への愛の教育者・新渡戸稲造と妻メアリー」として、出版予定である。

津田塾大学の創設者津田梅子(1873年受洗)も、東京女子大学の二代目学長安井哲子(1900年受洗)も、新渡戸夫妻にささえられ、また親しく指導を受けて、女性教育者として育てられた。日本YWCAの指導者で後に恵泉女学園を創設した河井道子(1900年受洗)も新渡戸夫妻に育成されたすぐれた女性教育者である。河井道子は、フレンド女学校(北海道北星学園)時代、近くに住む夫妻から人間尊重の人格教育の影響を最も大きく受けた一人である。これらの女子教育機関は今日も存続しているが、創立当初のキリスト教女子人格教育の理念が希薄になっていることは否めない。

Ⅳ. 共立基督教研究所の現代的意義

1871年日本基督公会(海岸教会)設立の一年前に、ルイーズ・H・ピアソンらは横浜山手に亜米利加婦人教授所(The American Mission Home)を設立、女子教育及び混血児養育をすでに開始した。そうして、ピアソンらは1881年(明治14年)に偕成伝道女学校(共立女子神学校の前身)を創設、多くの"Bible Woman"と呼ばれた女子献身者を育成した。5代目クリスチャンである筆者の初代小島弘子はJ. パラより受洗し、1882年(明治15年)偕成伝道女学校の二期生として入学し、「バイブル・ウーマン」として各地に伝道した。100年以上を経ていま共立研究所の所員としてこのテーマに取り組むことに神の摂理を思う。

新憲法をもって半世紀を経、民法も改正され、女性の地位も改善され向上した。しかし未だに日本的家意識構造を脱却出来ていない部分が多い。キリスト教的土壌の上に、或はそれとの相克の上に構築された欧米的女性論はそのまま日本に適用されるものではない。日本的土壌と文化を見据えた上で、聖書の間人観を現代に明確にしていく責任があると思う。新渡戸稲造と妻メアリーが近代日本形成期に注いだ情熱を真に受け継ぎ、人格教育の欠落している現代にその本質を提供する使命があると思うのである。

参考文献

1. 武田清子編「日本プロテスタント人間形成論」(明治図書出版、1963)78頁。
2. 「日本文化の講義」『新渡戸稲造全集』第19巻(教文館、昭和60年)7362頁。
3. 湊 晶子「フェミニズムと神学の接点—米国流解放論と日本流自立論にみる—」『東京基督教短期大学 論集』第22号1992、22-33頁参照。Akiko Minato, "Women's Jiritsu and Christian Feminism in Japan", *the Japan Christian Review*, Vol.59, 1993, pp. 7-17.
4. 「婦人に勤めて」『新渡戸稲造全集』第11巻(教文館、昭和54年)194頁。
5. 久山康編「近代日本とキリスト教—大正・昭和編—」(基督教徒兄弟団、昭和39年)135-140頁、札幌教育委員会編「新渡戸稲造(さっぽろ文庫 34)」(北海道新聞社、昭和60年)137-140頁参照、佐藤全弘「新渡戸稲造の信仰と理想」(教文館、1985年)、「現代に生きる新渡戸稲造」(教文館、1988年)参照。
6. 矢内原忠雄「余の尊敬する人物」(岩波書店、1982年)145-146頁。
7. 『新渡戸稲造研究』創刊号(新渡戸稲造会、平成4年)、同第2号(平成5年)メアリーに関する参考資料。
8. 札幌教育委員会編「遠友夜学校(さっぽろ文庫 18)」(北海道新聞社、昭和56年)参照。

アメリカにおける ピューリタン研究の動向

増井志津代

所員／東京基督教大学助教授

1930年代以降、今日にいたるまでのアメリカにおけるピューリタン研究の方向を決定したのは思想史家として知られるベリー・ミラー（1905-1963）である。本稿では、まず、ミラー以前のピューリタニズム理解の特徴を概観した後、ミラーのこの分野での貢献について検討し、さらにポスト・ミラー期、アメリカにおけるピューリタン、および、ピューリタニズム研究がどのような方向に進んできたかを紹介する。¹⁾

はじめに、ピューリタニズムの定義について述べたい。初期アメリカ史、およびテューダー、スチュアート朝イングランド史家の間では、ピューリタニズムは、エリザベス一世（1558-1603）の治世中にイングランドで起きた信仰運動と説明される。イングランドでは、1640年代から1650年代にかけて勢力を持ち、大西洋を隔てた新大陸には、1620年のプリマス、1628-30年のマサチューセッツ湾岸植民地の両英領植民地建設に伴いもたらされた。制度的には、ピューリタニズムは、オールドイングランドでは、1662年以降、「ノンコンフォーミティ」と看做され、ピューリタンの教職はイングランド教会により排斥され非正統主義（ヘテロドクシー）となる。一方、新大陸のニューイングランドにおいては、その影響力の低下、あるいは変質を経るものの、17世紀末まで、正統主義（オールドドクシー）として政治的、社会的な影響力を保持し続けた。イギリス、アメリカのピューリタニズム共、プロテスタント宗教改革以降の、特に、カルヴィニズムの世界的な拡大のコンテクストの中で発展してきた運動と理解される。²⁾

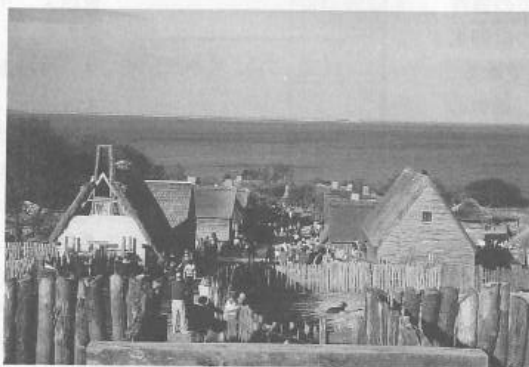
さて、ここで舞台を新大陸に絞る。アメリカ独立革命以降、ピューリタニズムは、その歴史的事実とは別に、アメリカ文化との関係のなかで「神話化」ともいえる理解（あるいは誤解）をされ続けてきた。その傾向は、独立革命時に始まる。例えば、第二代大統領ジョン・アダムズはピューリタンの新大陸への渡航をイングランドの圧政からの脱出とみなし、アメリカの国家的特殊性の根源をここに見出した。同時代の雄弁家、ダニエル・ウェブスターは、プリマス植民地の建設に当たったピルグリム・ファーザーズゆかりの「プリマス・ロック」をアメリカのデモクラシーの象徴と賛え、イングランド中北部に位置する農村スクールビーからオランダを経て移住した素朴な分離派ピューリタンの一団を民主主義との関

連で神話化することに貢献した。こうして、18世紀、名だたる政治家等によってアメリカのオールドドクシーとして奉られることになったピューリタニズムであるが、続く19世紀には、進歩主義的ユニテリアニズムの台頭による反カルヴィニズムのセンチメントの高まりとともに、代わって、その権威主義が取り沙汰されることになる。³⁾カルヴィニズムの古き衣を脱ぎ捨てようとしていたユニテリアンの立場からみると、ピューリタニズムは不寛容と抑圧の代名詞である。この立場から好んで焦点が当てられるのは、例えばロジャー・ウィリアムズのマサチューセッツ植民地からの追放、ボストン・コモンにおけるクエイカー教徒の処刑、セイレムの魔女裁判といった歴史事実である。ユニテリアン進歩主義の観点からは宗教的正統主義、すなわちピューリタニズムのカルヴァン主義的立場は、アメリカの発展を阻むものであり、この伝統からの離脱が、進歩のために選択すべき道ということになる。

20世紀初頭、ピューリタニズムを反進歩主義的思想だとする19世紀ユニテリアンの解釈は、ジョン・アダムズの子孫、チャールズ・アダムズ、ブルックス・アダムズにより再び強調される。一般ジャーナリズムのレベルでは、当時の文壇で多大な影響力を持っていたH.L.メンケンが、アメリカ文化はニューイングランド植民地建設者たちに端を発する狭大な見解により成熟を阻まれていると、前世紀より続くプロテスタントのモラリズムとヴィクトリア朝的偽善を批判するために「ピューリタニズム」という用語を用いた。こうして、新しい芸術の誕生を阻むような道徳主義やプロヴィンシャルイズムに総じて「ピューリタニズム」の名が冠せられるようになる。そのような時代を反映して、出版されたのがヴァーノン・パリントンの『アメリカ思潮』（*Main Currents in American Thought*, 1927）である。進歩主義的文芸批評家の立場を取るパリントンはそのピューリタン解釈の中でとくにマサチューセッツ植民地の政治体制を「神権政治（theocracy）」であるとみなし、ピューリタンの指導者層の頑迷さを強調した。マサチューセッツ湾植民地を「神権政治」あるいは「寡頭政治（oligarchy）」の場とみなす見解は、1921年に出版されピューリッツァー賞を受けたジェイムズ・トラスロウ・アダムズの『ニューイングランドの建設』（*The Founding of New England*, 1921）でも強調されている。

こうしたピューリタニズム批判の時代思潮の中、メンケン、バリントン、トラスロウ・アダムズ等の進歩主義の立場を批判、修正するかたちでピューリタニズム研究の新しい方向を提示したのが中西部シカゴ出身のペリー・ミラーであった。まず、ミラーが取り組んだのは、はたしてピューリタンは「カルヴィニスト」なのかという問である。ピューリタンの思想の根幹をなすのが「専横的」な予定説だとするバリントンや自由主義神学者の主張に対して、ミラーが強調したのがピューリタニズムのもつ「理性主義」の側面である。その例として、ピューリタンの契約神学 (Covenant theology) をとりあげ、ピューリタンは契約理念を用いて、神の支配と人間の主導権に折り合いをつけたのだとミラーは解説する。また、1636年に創立されたハーヴァード大学のカリキュラムの

内に、「敬虔」と「知性」、あるいは神の啓示と人間の理性との融合を図る努力を見出し、ピューリタンの知的側面を強調する。ミラーの代表作である『ニューイングランド・マインド：十七世紀』(The New England Mind: the Seventeenth Century, 1939) はピューリタンの思想世界の複雑さと重層性を再構築し、当時の進歩的知識者層による批判の標的となっていたプロテスタント、ファンダメンタリ



プリマス植民地：17世紀ピルグリム・ファーザーズの集落が再現され、多くの観光客を集めている。

ズムとピューリタニズムとの結び付きの可能性を完全に否定したのである。研究者としての舞台をハーヴァードに置いていたミラーは、ピューリタニズムの第一次資料に丹念にあたり、歴史の再構築を試みるケネス・マードック、サミュエル・エリオット・モリソン等、同大学のリヴィジョンリストに合流し、ピューリタン研究の新局面を切り開いた。⁴⁾

宗教史家のデイヴィッド・ホールは、ミラーのピューリタニズム再構築の努力の背後に、ラインホルド・ニーバーを代表とする新正統主義 (Neo-Orthodoxy) の神学的影響があることを指摘する。⁵⁾ ミラー自身は無神論者であったが、バリントン等が、大戦以前まで隆盛を誇った自由主義神学 (Liberal theology) の楽天的で浅薄な進歩主義に追従したのに対抗して、ミラーは新正統主義神学の強調する人間の罪、悲劇性、人間性の持つ限界といったよりリアリスティックな神学的強調点を採用したと考えられる。ミラー自身の用語では、こうしたペシミスティックな史観は、彼が第二、三代のピューリタニズムを説明する時に度々用いた「衰退 (declension)」という言葉で象徴される。『ニューイングランド・マインド：植

民地から地方へ』(The New England Mind: From Colony to Province, 1953) では、このピューリタニズムの「衰退」がやがて、運動の分裂を促し、18世紀の半ば頃までには、ジョナサン・エドワーズの正統主義的ではあるが急進的な福音主義 (Evangelicalism)⁶⁾ と、やがてユニテリアニズムへと発展する理性中心主義へと枝別れしていくと分析する。

ミラーは歴史家として、ピューリタンの思想生活の掘り起こしを行うと同時に、20世紀のアメリカの知識人としての自身の立場を非常に強く意識していた。そうした姿勢は、彼をして、単なる歴史の再構築者にとどまらせることをせず、時代の預言的な立場へと導くことになった。『荒野への使命』(Errand Into the Wilderness, 1956) の序文でミラー自身が述べるところによると、ピューリ

タニズムのテーマの発見自体、「中央アフリカのジャングルの縁での住しき」の中での「エビファニー」にも似た体験に根差しているという。アフリカのコンゴで、ミラーは、「アメリカの荒野」に置かれたピューリタンを思い「アメリカの経験の特殊性の認識」に至ったと告白する。⁷⁾

二つの大戦を経て、世界に冠たる国家となるアメリカの特殊性を意識しつつ進められたミラーのピューリタン研究は、

すなわち、アメリカの国家的アイデンティティの模索作業と重なることになった。ミラーのこの認識は、また、彼のピューリタン研究に後の研究者から度々指摘されることになるひとつの限界を与えることになった。ミラーの描く、ピューリタニズムのオーソドキシシーは、アメリカ人のアイデンティティを求めようとするミラー自身の用いたレンズ故、その解答となる特徴の部分のみが極端に強調され、一枚岩的で、ピューリタニズムの担い手達はあまりに同質的な一団として浮かびあがってくるのである。

20世紀初頭には、もはや、歴史の専門家には捨てられていた分野であったニューイングランド、ピューリタニズムを、第一次資料に丹念に当たり再構築したミラーの研究は、アメリカの大学に「思想史 (Intellectual history)」のサブディシプリンを誕生させ、また、その欠点を含めて、後の歴史、文学分野の研究者に決定的な影響を与えることになった。歴史研究は、ハーヴァード大学で長く教鞭を取るようになったバーナード・ベイリン、イエール大学で多くの研究者を育てたエドモンド・モーガンといった二人の後継者により引き継がれたが、その影響

は、ミラーの直接の指導学生達には止まらず、1960年代「ピューリタン研究」で総称される歴史、文学の分野での多くの研究を産みだすことになった。

エドモンド・モーガンの研究書の特徴は、簡潔で実証的であり、特にピューリタニズムの社会史的側面の分析にすぐれている。荘重で難解なミラーの文体の影響をまったく受けず、非常に分かりやすい物語のように書かれながら、鋭い本質を突くモーガンの研究書はピューリタニズム研究の入門書としてもうってつけである。初代総督ウインスロップの政治思想を「契約神学」との関係の中でとらえた『ピューリタンのジレンマ：ジョン・ウインスロップの物語』（*The Puritan Dilemma: The Story of John Winthrop* 1958）はモーガンの初期の研究書であるが、ウインスロップの信徒としての霊性にも焦点を当て、ピューリタンの信仰生活の実践面を知るうえでも有益である。一方、バーナード・ベイリンは、研究の関心を経済史に向け、植民地ピューリタンの倫理と商人の商業的価値観の関係についての研究書『17世紀、ニューイングランドの商人』（*The New England Merchants in the Seventeenth Century*, 1955）で、マックス・ウェーバーにより最初に打ち出された理論をニューイングランドのコンテキストで検討している。

モーガン、ベイリンに続くポスト・ミラー期の研究者達は、第一次資料を重んじるミラーの研究を方法論的には引き継いでいるが、その関心は、もはやミラーの固執したアメリカ文化の特殊性にはない。さらに細分化され綿密になった研究で、ミラーによって打ち出されたピューリタン解釈の曖昧さや捻れは、次々に、若手研究者により指摘され修正されてきている。

ミラーにより主張された、ピューリタニズムにアメリカ文化の特殊性を見出す文化研究の視点を最も強く受け継いだのは、歴史家よりもアメリカ文学研究家である。ミラーが先鞭をつけたピューリタンの残した第一次資料の検討の成果は、ピューリタンの文学的イマジネーションの特殊性の認識を導きだした。例えば、ピューリタンが採用した聖書解釈の中でも、特に予型論的解釈（Typological interpretation）は、後のアメリカ文学に大きな影響を残したと主張される。タイポロジーの細かい分析とその影響の研究をはじめとして、文学研究の分野でミラーの業績を受け継いだ多くの研究者のなかで最も重要な研究成果を上げているのは、現在、ハーヴァード大学英文学科でポジションの上でもその後継者となっているサクヴァン・パーコヴィッチである。パーコヴィッチ

は、ピューリタンの歴史叙述、日記、説教、詩等のテキストを入念に読み、「タイポロジー」やピューリタンの牧師の説教における「エレミヤの嘆き」（*Jeremiad*）等の修辞上の特徴を神学的、歴史的な枠組みの中でコンテクスチュアライズする研究を進めてきた。こうした方法は近年のニュー・ヒストリシズムの流行で一般化された感があるが、この文学批評理論が脚光を浴びる以前に、すでに、パーコヴィッチの視野は、多様なテキスト群にひろがり、インターテクスチュアリティを探る研究に先駆的な業績をあげてきた。

政治的ラディカルなユダヤ系家庭に育ち、カナダからアメリカへとわたってきた移民である出自をししばしば強調するパーコヴィッチは、アメリカのピューリタニズムを外部者の視点で、イデオロギー的に分析しようと試みる。⁸⁾ 「アメリカ的自己のピューリタンの起源」（*The Puritan Origins of the American Self*, 1975）と、まさにタイトルからして意図的にアメリカ人のアイデンティティをピューリタニズムに遡ろうとするパーコヴィッチの打ち出すピューリタン像は、ミラーの提示した一枚岩的なピューリタン認識をより増強している。ピューリタンの荒野での「使命（errand）」をアメリカの国家的使命に発展させて解釈する点でもミラーを継承する。こうしたパーコヴィッチのピューリタン解釈に対する他の研究者からの批判は絶えないが、



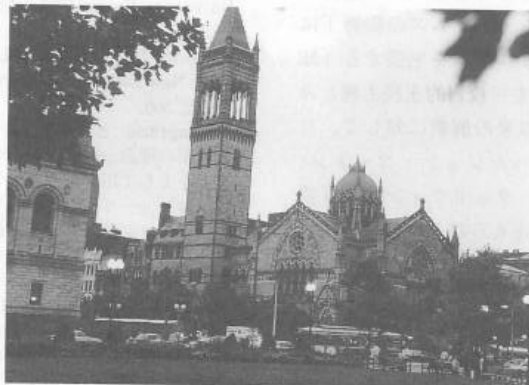
New England Primer
（アルファベットと教義を教える為に用いられた）

しかし、われわれ非アメリカ人がアメリカを外から観察する時、あるいはアメリカが国家としてのアイデンティティを外部に提示するとき、パーコヴィッチの解釈は確かに説得力を持つ。パーコヴィッチの編集した『予型論と初期アメリカ文学』（*Typology and Early American Literature*, 1972）、『アメリカのエレミヤの嘆き』（*The American Jeremiad*, 1978）は、アメリカ文学研究上はすでに古典的な研究価値を持つものである。

ポスト・ミラー期のピューリタン研究は、特に歴史分野における社会史や女性史の方法論の登場以来、細分化を続けながら、ピューリタニズムを多面体として提示してきた。社会史の分野では、ジョン・デモスの『小さな共同体：プリマス植民地における家族生活』（*A Little Commonwealth: Family Life in Plymouth Colony*, 1970）、社会史と思想史を結ぶ研究としては、前述したモーガンの研究を初めとして、デイヴィッド・ホルの『忠実な牧者：17世紀ニューイングランド教会の歴史』（*Faithful Shepherd: A History of the New England Ministry in the Seventeenth Century*, 1972）等があげられる。社会心理学的なアプローチはセイレムの魔女裁判やアンチノミアン

論争を扱う歴史家に頻繁に用いられる。ジョン・デモスの『サタン歓待』(Entertaining Satan, 1982)、ポール・ホイヤーとスティーヴン・ニセンバウムの『セイレムの狂気：魔術の社会的起源』(Salem Possessed: The Social Origins of Witchcraft, 1974)はその代表である。また、このテーマは、女性史家によるすぐれた研究書を数々うみだしている。キャロル・カールセンの『女のかたちをした悪魔：ニューイングランド植民地における魔術』(The Devil in the Shape of a Woman: Witchcraft in Colonial New England, 1987)はマテリアリスト・フェミニストの理論を用いた一連の魔女裁判の分析である。また、エイミー・ラングの『預言者の女性：アン・ハッチンソンとニューイングランド文学における異議提唱の問題』(Prophetic Woman: Anne Hutchinson and the Problem of Dissent in the Literature of New England, 1987)もフェミニストの立場からの優れたハッチンソンの評伝であり、アメリカン・フェミニズムのルーツを植民地時代にまでさかのぼった研究書になっている。

生活史の側面から初期ニューイングランドの女性にテーマを絞った研究書としては、ひとりの産婆の残した日記をもとに、たんねんにその時代の社会を浮き彫りにし、ピューリッツァー賞、パンクロフト賞、アメリカ歴史協会賞と権威ある賞を総なめにしたローレル・サッチャー・ウルリクの『ある産婆の物語：マーサ・バラードの人生、その日記を基に、1785-1812』(A Midwife's Tale: The Life of Martha Ballard, Based on her Diary, 1785-1812, 1990)がある。独立革命後のニューイングランド社会を深く洞察した研究書である。同じ著者による『よき妻たち：1650-1750年における北ニューイングランド女性の生活におけるイメージと現実』(Good Wives: Image and Reality in the Lives of Women in Northern New England, 1650-1750, 1980)は、聖書から導き出されたピューリタンの女性のイメージとその現実を検討した研究書である。また、ピューリタニズムにおける女性性の意義に焦点をあてたアマンダ・ポーターフィールドの『ピューリタン・ニューイングランドにおける女性の敬虔』(Female Piety in Puritan New England, 1992)は、しばしば父権的イメージで語られがちなピューリタンの霊性を、オリゲネスやヒエロニムスの教父時代から中世の修道院を経て継承されてきた「キリストの花嫁」のメタファーを通じて分析し、またピューリタニズムを家庭生活との関連か



ボストンにあるオールド・サウス教会(組合派)

ら分析した研究である。

ミラーやバーコヴィッチにより提示された一枚岩的なピューリタニズム理解に挑戦した研究書に共通するのは、近代主義の先行者としてのイメージを与えられたピューリタニズムを、宗教的プリミティヴィストとしてとらえなおす観点である。この立場の研究には、セオドア・ドワイト・ボウズマンの『古来の生活を生きる：ピューリタニズムにおける原初主義的側面』(To Live Ancient Lives: The Primitivist Dimension in Puritanism, 1988)がある。ピューリタニズムを資本主義の先行者とみなしたマックス・ウェーバーやクリストファー・ヒル、新科学の先行者としたロバート・マートン、変革主義者としたデイヴィッド・リトル、千年王国待望の未来志向者としたバーコヴィッチが、いづれも近代との関連でピューリタニズムを説明してきたのに対し、ボウズマンは伝統主義者としてピューリタニズムを解釈する。ピューリタニズムの3つの強調点「モラリズム」、「敬虔主義」、聖書的「原初主義」のうち聖書的「原初主義」に焦点をあて、その「復古主義(restorationism)」を分析する。ボウズマンの視点とは異なるが、デイヴィッド・ホール『驚異の世界、裁きの日：初期ニューイングランドにおける民衆的宗教信仰』(Worlds of Wonder, Days of Judgement: Popular

Religious Belief in Early New England, 1989)も、ピューリタニズムを中世ヨーロッパの宇宙観や迷信を引き続き持ち続けたエリザベス朝英国人の延長線上で理解し、その心的世界を「フォーク」や「マジック」に関する素朴な信心との関係から解明した研究書である。ミラーにより打ちたてられた非常に理性的なピューリタニズム像に挑戦し、ニューイングランド植民地の住人達を民衆的、土俗的なレベルで分析している。

回心体験に焦点をあててピューリタニズムを理解したアラン・シンプソンの『英米におけるピューリタニズムの伝統』(Puritanism in Old and New England, 1955; 大下尚一、秋山健訳、未来社、1967)やウィリアム・ハラーの『ピューリタニズムの台頭』(The Rise of Puritanism, 1938)に同われるように、イギリス人によるピューリタニズム研究はアメリカのそれとは傾向を少し異にしていた。ミラーによるアメリカの特異性強調に異議を唱えるアメリカ人研究者のあいだでは、こうしたイギリス人によるピューリタニズム研究に目をとめ、英米のピューリタニズムを断絶的ではなく環大西洋的な運動として継続的に捕

え直そうとの努力が生れてきた。その代表が、ステイヴン・フォスターの『長き論議：イングランドピューリタニズムとニューイングランド文化の形成、1570-1700』(The Long Argument: English Puritanism and the Shaping of New England Culture, 1570-1700, 1991)で、ニューイングランドのピューリタニズムをイングランドの社会的、歴史的展開のなかに位置付ける試みになっている。同じような試みはジャニス・ナイトの『マサチューセッツにおける正統主義：アメリカン・ピューリタニズム再読』(Orthodoxies in Massachusetts: Rereading American Puritanism, 1994)にも見受けられる。「オーソドキシーズ」と複数形を用いたナイトの論点は、ミラーやパーコヴィッチの研究から導きだされるピューリタン正統主義の全体像を面的に偏った解釈とする批判に基づいている。ナイトは、正統主義内部にはすくなくとも二つの強力な派閥があったとする。ウィリアム・エイムズの影響下にあり救済におけるプリバレイション主義を主張する「知的父祖達 (Intellectual Fathers)」を一枚岩的正統主義とみなしてきた、これまでのミラー以来の解釈に対して、リチャード・シブスの影響下にあったジョン・コットン、ジョン・プレストン、トーマス・グッドウィン等の「霊的兄弟達 (Spiritual Brethren)」をもうひとつの正統主義としてかかげる。ナイトによると正統主義内部の論争は、イングランドから継続してニューイングランドにもたらされたものであり、そこには大西洋をはさんだ運動の連続性がある。

以上、アメリカにおけるピューリタニズムの研究動向をベリー・ミラーの業績とその批判的継承を中心に、現在まで概観してみた。歴史的分野では、社会史の方法の導入以来、テーマが細分化され詳しい研究がなされるようになった分、大局的にピューリタニズムをとらえる研究書が少なくなっていた近年の傾向は、ホール、ボズマン、フォスター、ナイトの研究では最近の歴史記述の方法論に関する議論を踏まえた上で克服され、再び大きな語りの方法を獲得してきているように思える。また、本稿ではピューリタニズムに焦点をあてたため、言及しなかったが、文化多元主義やエコロジーへの関心の高まりもあり、長い間周縁化されてきたインディアン等非ヨーロッパ系の植民地史の重要な担い手も、最近の研究書⁹⁾では多く取り上げられるようになってきていることを最後に付け加えておきたい。

1) 本稿は1996年10月22日、東京基督教学園共立基督教研究所セミナーでの口頭報告「アメリカ植民地史研究の動向——ニューイングランド、ピューリタニズムを中心に——」をまとめ、加筆したものである。1977年までのアメリカのピューリタニズム研究動向に関しては、秋山健、今関恒夫、大下尚一共編『同志社アメリカ研究』別冊2号『New England Puritanism書誌』(京都、同志社大学アメリカ研究所、1977年)に掲載された「ニューイングランドピューリタニズム研究の動向——解題にかえて——」参照のこと。

- 2) David D. Hall, "Puritanism," Richard Wightman Fox & James T. Kloppenberg, A Companion to American Thought (Oxford UK& Cambridge USA: Blackwell, 1995), 559. 本稿は、同書におけるホールの見解と、同著者により編集された、Puritans in Seventeenth-Century Massachusetts (New York: Holt Rinehart and Winston, 1968) に多くを負っている。
- 3) ユニテリアンによるカルヴァン主義批判は、1740年代の第一次覚醒時におけるチャールズ・チョウンシイによるジョナサン・エドワーズ批判と、ボストン及マサチューセッツ東部における「自由主義キリスト教 (liberal Christianity)」の登場にまで遡ることができる。1805年、神学的リベラルの立場を取る神学者ヘンリー・ウェアがハーヴァード・カレッジのホリス神学教授に任命されて以来30年間「ユニテリアン論争」はニューイングランド神学の中心テーマとなる。やがて、この立場はラルフ・ウォルドー・エマーソン等の超絶主義者により批判的に継承される。
- 4) マードック、モリソンには次の著書がある。Kenneth Murdock, Increase Mather, the Foremost American Puritan (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1925); Samuel Eliot Morison, Builders of the Bay Colony (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1935); Morison, The Founding of Harvard College (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1935); Morison, The Intellectual Life of Colonial New England (New York: New York University Press, 1949).
- 5) Hall, 560.
- 6) "evangelical" という用語には多くの意味があるが、主に英国宗教改革の理念と信条をひきつぐ、人種的には白人、プロテスタントをさして用いられる。アメリカにおける「福音主義」のルーツはピューリタンの末裔であるジョナサン・エドワーズ、および、アングリカンの巡回伝道者ジョージ・ホイットフィールドを中心に18世紀半ばに起きた第一次覚醒運動、これより規模としては大きい19世紀初頭の第二次覚醒運動のふたつのリバイバル運動にある。詳細は、D. W. Bebbington, Evangelicalism in Modern Britain: A History from the 1730s to the 1980s (Grand Rapids: Baker, 1991); Mark A. Noll, David W. Bebbington, and George A. Rawlyk, eds., Evangelicalism (New York: Oxford University Press, 1994) 参照のこと。
- 7) Perry Miller, *Errand Into the Wilderness* (Cambridge, Massachusetts & London, England: The Belknap Press of Harvard University, 1956). viii-ix.
- 8) この傾向は、パーコヴィッチの最近の著作で特に顕著になってきている。Sacvan Bercovitch, *The Rites of Assent: Transformation in the Symbolic Construction of America* (New York: Routledge, 1993) 参照のこと。
- 9) 例えば、James Axtell, *The European and the Indian: Essays in the Ethnohistory of Colonial North America* (Oxford: Oxford University Press, 1982); William Cronon, *Changes in the Land: Indians, Colonists, and the Ecology of New England* (New York: Hill and Wang, 1983)。セイレム魔女裁判の契機をつくったとされる牧師パリスの家の召使、西インド諸島出身のインディアン、ティチュバに関する研究書としては、Elaine G. Breslaw, *Tituba, Reluctant Witch of Salem: Devilish Indians and Puritan Fantasies* (New York: New York University Press, 1995) がある。

* 定期購読ご希望の方は、研究所までご連絡下さい。

共立基督教研究所
「共立研究」

編集委員長 稲垣久和
編 集 小林高德